

# 2022年度入学試験問題

## 国語

### 注意

- 一 問題冊子は一冊(十五ページ)、解答用紙は二枚です。
- 二 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により解答できない場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 三 すべての解答用紙に受験番号を、すべて算用数字で、記入しなさい。
- 四 解答は、すべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五 試験終了後、問題冊子は必ず持ち帰りなさい。

## 問題 一

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(出題の都合上、本文に省略した箇所がある。)

かつて人々は死者を大切な仲間として扱い、対話と交流を欠かさなかった。死者だけではない。神や仏など目に見えぬもの、人を超えた存在と空間・時間を分かち合い、<sup>(1)</sup>そのために都市と社会のもつとも重要な領域を提供した。

わたしは今世紀に入ったところから、各地の史跡をめぐり歩くようになった。よく行くのは古都や神社仏閣である。国内だけでなく、ヨーロッパの中世都市やインドの寺院、インドネシアのポロブドゥール、カンボジアのアンコール・ワットなどアジアの遺跡もたびたび訪れた。

わたしたちは都市というと、人間が集住する場所というイメージをもっている。しかし、実際に古今東西の史跡に足を運んでみると、街の中心を占めているのは神仏や死者のための施設である。

中世ヨーロッパでは、都市は教会を中心に建設され、教会には墓地が併設されていた。日本でも縄文時代には、死者は集落中央の広場に埋葬された。有史時代に入っても、寺社が都市の公共空間の枢要に位置する時代が長く続いた。そうした過去の風景を歩いていると、現代が、日常の生活空間から人間以外の存在を放逐してしまつた時代であることを、改めて実感させられる。

前近代の日本列島では、人々は目に見えない存在、自身とは異質な他者に対する生々しい実在感を共有していた。神・仏・死者だけではない。動物や植物までもが、言葉と意思の通じ合う一つの世界を構成していた。超越的存在と人間の距離は時代と地域によって異なつたが、人々はそれらの超越的存在に「カミ」のまなざしを感じ、その声に耳を傾けながら日々の生活を営んでいた。

カミは単に人とこの空間を分かち合っていただけではない。社会のシステムが「エンカツ」に機能する上で不可欠の役割を担っていた。定期的に開催される法会や祭礼は、参加者の人間関係と社会的役割を再確認し、構成員のつながりを強化する機能を果たした。祭りという大きな目的に向けての長い準備期間のなかで、人々は同じ集団に帰属していることが決して「グウゼン」ではないことを自覚し、自分たちをここに居合わせるようにしむけたカミのために、一致協力して仕事を成し遂げる重要性を再確認して

いくのである。

自分たちの周囲を振り返ってみればわかるように、人間が作る集団はそれがいかに小さなものであっても、その内部に感情的な軋轢や利害の対立を発生させることを宿命としている。共同体の人々は、宗教儀礼を通じてカミという他者へのまなざしを共有することによって、構成員同士が直接向き合うことから生じるストレスと「ギンチヨウ」感を緩和しようとした。

中世に広く行われた起請文には、集団の秩序維持に果たした神仏の役割が端的に示されている。起請文とは、ある人物ないしは集団がみずからの宣誓の真実性を証明するために、それを神仏に誓つた文書であり、身分階層を問わず膨大な数が作成された。起請文の末尾には監視者として神仏が勧請され、起請破りの際にはそれらの罰が身に降りかかる旨が明記された。双方の言い分が対立したとき、起請文を作成した上で二人を堂社に籠もらせ、先に体に異変が起こつた方を負けとする方法もしばしば取られた。

だれかを裁かなければならなくなったとき、人々はその役割を超越的存在に委ねることによって、人が人を処罰することに伴う罪悪感と、罰した側の人間に向けられる怨念の循環を断ち切ろうとした。カミによって立ち上げられた公共の空間は、羊水のように集団に帰属する人々を穏やかに包み込み、人間同士が直にぶつかりあうことを防ぐ緩衝材の役割を果たしていたのである。<sup>(2)</sup>カミが緩衝材の機能を果たしていたのは、人と人の間だけではなかった。集団同士の対立が極限までエスカレートすると、人はその仲裁をカミに委ねた。前近代の日本列島では、村の境界や日照りの際の川からの取水方法をめぐって共同体間でしばしば紛争が生じ、死傷者が出ることも珍しいことではなかった。その対立が抜き差しならないレベルにまで昇まつたときに行われたものが、神判とよばれる神意を問う行為である。

神判の代表的なものに、盟神探湯がある。これは熱湯のなかに手を入れてなかの小石などを拾わせるものであり、対立する双方の共同体から代表者を選出し、負傷の程度の軽い方を勝ちとした。両者に焼けた鉄片を「ニギ」らせる鉄火という方法もあった。勝利した側に神の意思があるとされ、敗者側もその裁定に異議を差し挟むことは許されなかった。神の実在に対するリアリティの共有が、こうした形式による紛争処理を可能にしたのである。

前近代の日本列島では、深山や未開の野には神が棲むと考えられていた。そのため、そこに立ち入ったり狩りを行ったりするときには土地の神に許可をえる必要があった。かつて狩師の世界では、狩りのために山に立ち入るにあたって数々の儀礼を行うことが不可欠とされてきた。また山中でも、言動をめぐって多くのタブーが存在した。

その背景には、人の住まない山は神の支配する領域であり、狩りという行為は神の分身、あるいは神の支配下にある動物を分けていただく儀式という認識があった。そのため、狩りの対象は必要最小限に留め、獲物のいかなる部位も決して無駄にしないように努めなければならなかった。<sup>(3)</sup>それが乱獲を防ぎ、獲物をめぐる集団同士の衝突を防止する役割を担ったのである。

カミは海峡をへたてた国家の間においても、緩衝材としての役割を果たしてきた。朝鮮半島との間に浮かぶ沖ノ島には、四世紀以来の長期にわたる祭祀の跡が残されている。日本から朝鮮半島と大陸に渡ろうとする航海者たちは、この島に降り立って、その先の海路の無事を神に祈った。

島も大海原も、その本源的な支配者はカミであると信じられていた。かつて辺境の無人島はその領有を争う場所ではなく、身と心を清めて航海の無事を静かにカミに祈る場所だった。島だけではない。王の支配する国家の間に広がる無人地帯も、その本源的所有者はカミだった。人が住まない場所はカミの支配する領域だったのである。

だが、近代に向けて世俗化の進行とカミの世界の縮小は、そうしたカミと人との関係の継続を許さなかった。人の世界からは神仏だけでなく、死者も動物も植物も排除され、特権的存在としての人間同士が直に対峙する社会が出現した。人間中心主義としてのヒューマニズムを土台とする、近代社会の誕生である。<sup>(4)</sup>

近代思想としてのヒューマニズムが、人権の拡大と定着にどれほど大きな役割を果たしたかについては警告する必要もない。しかし、近代化は他方で、わたしたちが生きている世界から、人物間、集団間、国家間の隙間を埋めていた緩衝材が失われていくことを意味した。体に棘をはやした人間が狭い箱に隙間なく詰め込まれ、少しの身動きがすぐさま他者を傷つけるような時代が幕を開けた。

(佐藤弘夫『日本人と神』による)

問一 傍線部アイウエオを漢字に直しなさい。

問二 傍線部(1)について、「そのために都市と社会のもっとも重要な領域を提供した」とは具体的にどのようなことを指すのか、本文の内容に即して説明しなさい。

問三 傍線部(2)について、「人はその仲裁をカミに委ねた」のはなぜか、その理由をわかりやすく説明しなさい。

問四 傍線部(3)について、「それ」とは何を指すのか、本文の内容を踏まえてわかりやすく説明しなさい。

問五 傍線部(4)について、「近代社会の誕生」とは、社会のどのような変化を意味するのか、本文全体の内容を踏まえて説明しなさい。

次の文章は、古井由吉の「杏子」の一節である。登山中、谷底で途方に暮れていた杏子を救った「彼」は、その後杏子と恋愛関係になり、彼女の部屋を訪れることとなる。杏子は、亡くなった両親の遺した家に姉の一家と暮らしており、「彼」が訪れた際には姉がケーキと紅茶を振舞ってくれた。だが、姉が杏子の部屋を出て行った後、杏子は嫌悪感をむき出しに姉の態度を批判する。以下の文章を読んで、後の問に答えなさい。(出題の都合上、本文に省略した箇所がある。)

「あなた、いまあの人のことを観察してたでしょう。あなたが何を見たか、言ってあげようか」

そして声をひそめて、いましがたの姉の一举一動を、彼の見たよりもっと細かく、もっとどぎつく言ってみせた。杏子の目の冷たさに彼は恐怖に近い感情を覚えた。その目を両手で覆ってやりたい衝動にかられた。だがその時、彼は杏子がいましがたまで、姉が部屋にいる間ずっと、奥のほうへ視線をあげたままに気づいた。彼の物問い顔を見て杏子は答えた。

「見てなくなつて、わかるのよ。いつだって、何もかも、おんなじなんですよ。学校のお友達がたまに遊びに来る時も、あなたの御飯をここに運んでくる時も、いまあなたが見たのと同じことが、そっくりくりかえされるのよ。花をいじるのも同じ。あの花はあたしの領土への、あの人の橋頭堡<sup>注一</sup>なのよ。それとも架橋かな、病気の姉妹の……」

声が最後に泣き声のようになって、杏子は両手で顔を覆った。だがしばらくして手を離すと、杏子はもう目の吊り上がった顔になって、姉を罵りはじめた。

「いいえ、あたしはあの人とは違うわ。<sup>(1)</sup>あの人は健康なのよ。あの人の一日はそんな繰返しばかりで見事に成り立っているんだわ。廊下の歩きかた、お化粧のしかた、掃除のしかた、御飯の食べかた……、毎日毎日、死ぬまで一生……、羞かしげもなく、しかつめらしく守つて……。それが健康というものなのよ。それが厭で、あたしはここに閉じこもつてるのよ。あなた、わかる。わからないでしょう。そんな顔して……」

そう言われて、彼は自分の顔がいつかの《おかしな》顔にまたこわばれるのを感じた。谷底のことが、吊橋<sup>注二</sup>のことがまた思い浮

んだ。しかしここは何とかして杏子を宥めなくてはならない。そう思って、彼は自分の分別をまくし立てた。

「癖つてのは誰にでもあるものだよ。それにそういう癖の回復は、生活のほんの一部じゃないか。どんなに回復の中に閉じこめられているように見えても、外の世界がたえず違つたやり方で交渉を求めてくるから、いずれ臨機応変に回復を破っているものさ。お姉さんだってそうだろう。そうでなくては、一家の切りまわしなんかできないもの」

「そうね、あなたの思っている人生というのは、そちらのほうなのね。でも、どんなに外の世界に応じて生きていたって、残る部分はあるでしょう。すこしも変らない自分自身に押しもどされる時間が、毎日どうしたって残るでしょう。そこでいつも同じことを、大まじめでくりかえしているのよ。あたしの思う人生は、こちらのほうよ」

「生きているということが、そういうことなんだから、しかたのないことじゃないか。それとも、君は生きていることを憎んでいるの」

「憎んでる。お姉さんを見る時は」

杏子は下を向いてしまった。ケーキと紅茶が杏子の憎む反復の中でもっとも屈辱的な反復を、物を食べる時の癖の回復をほめかして、<sup>(2)</sup>杏子の前に嘲弄的な表情で並んでいた。これで四度目だったな、と彼は胸の内と思った。しかし物を食べるころを他人に見られたがらない杏子の気持をようやく理解しながら、せっかくの紅茶のさめていくのを見ると、彼はやはり途方に暮れた。そんな事で途方に暮れる自分をどうしようもなかった。

「食べようよ」と彼はつぶやいてしまった。

すると杏子は顔を上げて、あまりにも素朴な言葉に触れて困惑したように笑い、それからしかたなさそうにフォークを取って、ショートケーキのクリームを端から崩しはじめた。

杏子はテーブルに肘をついて、フォークをつまんだ手を手首からぐったり垂らし、フォークの先でクリームをちよつと掬っては口もとに運んだ。ほんの僅かなクリームにも、唇が円められて急に分厚い感じになり、フォークの先をぬうと包み取った。

閉じた唇の奥で舌がゆっくりのたうつのが頬に顫われ、その動きがとまると、喉もとの柔らかな肌がだるそうにふくらんで、口

の中のものを呑み下した。そして杏子は胸で息をついた。甘えで粉らわしような反復の羞かしさを、彼女は彼の前でひっそり耐えていた。それを見て彼は口の中に物をふくんだまま、声をかけた。

「君の癖なら、僕は耐えられるような気がするよ」

「そうねえ……」と杏子はフォークを宙に止めてつぶやき、彼の言葉にか、自分の声のぬめりにか、また困りはたように笑い、軀をかすかに左右によじった。自分自身からの脱れがたさをなかばつらがり、なかばひえびえとそれに浸っているという風だった。

「いまのあたしは、じつは自分の癖になりきってはいないのよ。あたしは病人だから、中途半端なの。健康になるということは、自分の癖にすっかりなりきってしまったって、もう同じ事の繰返しを気味悪がったりしなくなるということなのね。そうすると、癖が病人の場合よりも露わに出てくるんだわ。そんな風になったら、あなたはあたしに耐えられるかしら……」

「どこ夫婦だって、耐えてるじゃないか」

「自分の癖の露わさで、相手の癖の露わさと釣合いを取っているのね。それが健康ということの凄さね」

「二人とも、凄くなつてしまえばいい」

杏子は眉をひそめた。彼は自分の食べかたを意識してぎこちなくなった。二人は黙りこんで、お互いに自分の羞かしいと名みの中に耽った。声を立てずに、息さえころして食べていると、自分自身の盲目的な生命の中に斜めに浸りこんで、目だけ外に出して我身を見つめているような孤独感があった。しばらくして杏子はクリームの中から露出したイチゴをフォークの先でつまきながら言った。

「むかしお友達が、好きな人のちよつとした癖を思い出すと、ただもう幸福な気持ちになるって言ったことがあったけれど、あたしにはそれがどうしてもわからなかった……」

杏子はいつまでもイチゴをつついては転がしていた。それから目を上げて、彼の食べるさまをいたましように眺めやりながら、また言った。

「だけど、あなたに出会ってから、人の癖が好きになるということが、すこしわかったような気がする」

「どんな癖だろうね。僕は健康人だから、わからない」

<sup>(4)</sup>物を食べる頑な哀しみの中から、彼は目を上げずに答えた。杏子の言葉を撥ねつけるのではなくて、嫌悪の中からようやく差し伸べられた彼女のやさしさを、理解したという気持ちからだった。杏子も彼の言葉を誤解せずに受け止めた。

「そうね……。あなたには、あたしのほうを向くとき、いつでもすこし途方に暮れたようなところがある。自分自身からすこし後へさがって、なんとなく稀薄な、その分だけやさしい感じになって、こつちを見ている。それから急にまとわりついてくる。それでいて中に押し入って来ないで、ただ肌だけを触れ合って、じつとしている……。いつも同じだけど、普通の人みたいに、どぎつい繰返しじゃない」

彼はそうではない時の自分の姿を思った。杏子のそばにいながら自分ひとりの不安に耽って、無意識のうちに同じ癖を剥き出しにして反復している獣じみた姿を……。そして彼のそばで眉をかすかに擧めてそれに耐えている杏子の心を思いやった。しかしその思いは胸の中にもしまつて、杏子の差し出した言葉を彼はそのまま受け取った。

「入りこんで来るでもなく、距離を取るでもなく、君の病気を抱きしめるでもなく、君を病気から引張り出すでもなく……。僕自身が、健康人としても、中途半端なところがあるからね」

「でも、それだから、ここでこうやって向かいあって一緒に食べていられるのよ。あたし、いま、あなたの前で、すこしも羞かしくないわ」

そう言うて杏子はフォークで至るところを突き刺されて崩れかけたイチゴを指先でつまんで口の中に押しこみ、赤く濡れた唇を二匹の別な生き物のように動かした。それから彼女はふと女くさい手つきになってフォークの柄を指先できゅうつとつまみ、ケーキを崩して頬ばり、テーブルの上に目を注ぎながら静かな音を立てて食べはじめた。彼は杏子に合わせて音を立てて食べながら、内側から自分の頬の動きを、同じ物哀しげな表情の、同じ鈍重な反復をじつと感じ取っていた。

(中略)

(5) 杏子は髪をなげつけながら窓辺へ行ってカーテンを細く開き、いつのまにか西空にひろがった赤い光の中に立った。  
「明日、病院に行きます。入院しなくても済みそう。そのつもりになれば、健康になるなんて簡単なことよ。でも、薬を吞まされるのは、口惜しいわ……」

そう嘆いて、杏子は赤い光の中へ目を凝らした。彼はそばに行つて右腕で杏子を包んで、杏子にならつて表の景色を見つめた。家々の間をひとすじに遠ざかる細い道のむこうで、赤みをました秋の陽が瘠せ細った樹の上へ沈もうとしているところだった。地に立つ物がすべて半面を赤く炙られて、濃い影を同じ方向にねつとりと流して、自然らしさと怪奇さの境目に立つて静まり返っていた。

「ああ、美しい。今があたしの頂点みたい」

杏子が細く澄んだ声でつぶやいた。もうなかば独り言だった。

(古井由吉「杏子」による)

注一 花をいじる＝姉は杏子の部屋を立ち去る際に、花瓶に活けられた花の挿し加減を気にして何度も直していた。

注二 橋頭堡＝河などでの上陸作戦で、後続部隊を上陸させるために相手岸に確保した陣地、足がかり。

注三 いつかの《おかしな顔＝谷底で杏子を見つけ、吊橋を渡つて彼女を救い出した時の「彼」の表情を、杏子は後に「困りはてたような、すこしおかしな顔」と言っていた。

問一 傍線部(1)について、ここで杏子の言う「健康」とはどういうことか、説明しなさい。

問二 傍線部(2)について、ここではケーキや紅茶が人間のよう表情を持つものとして描かれているが、そうした表現法を何と  
いうか。漢字三文字で答えなさい。また、杏子に対してなぜケーキや紅茶が「嘲弄的な表情」をしているように映るのか、  
説明しなさい。

問三 傍線部(3)について、「二人とも、凄くなつてしまえばいい」とはどういうことか、説明しなさい。

問四 傍線部(4)について、「物を食べる頑な哀しみ」とはどういうことか、説明しなさい。

問五 傍線部(5)について、ここで杏子が自ら病院に行く気になったのはなぜか、杏子の気持ちの変化に即しながら説明しなさい。

次の文章は、六歌仙の一人である大友黒主の活躍を伝えるエピソードである。これを読んで、後の問に答えなさい。

亭子の帝、石山注一につねに詣でたまひけり。国の司、「民疲れ、国滅びぬべし」となむわぶると聞注二こしめして、注三こと国々の御庄などに仰せ言たまひければ、持て運びて御まうけをつかうまつりて、詣でたまひけり。近江の守、「いかに聞こしめしたるにかあらむ」と、嘆きおそれて、また、むげにさて過ぐし奉りてむやとて、帰注四らせたまる打出の浜に、世注五の常ならずめでたき飯屋どもを作りて、菊の花のおもしろきを植ゑて御まうけをつかうまつれりけり。国の守も、おぢおそれて、ほかに隠れ居りて、ただ黒主をなむ据ゑ置きたりける。おはしまし過ぐるほどに、殿上人、「黒主はなどてさてはさぶらふぞ」と問ひけり。院も御車おさへさせたまひて、「なにしにここにはあるぞ」と問はせたまひければ、人々問ひけるに、申しける。  
注六 ささら波間もなく岸を洗ふめり 渚清くは君とまれとか  
 とよめりければ、これにめでたまうてなむとまりて、人々に物たまひて帰注七らせたまひける。

『大和物語』による

注一 亭子の帝宇多天皇のこと。讓位の後に出家して法皇となった。

注二 石山近江国の石山寺のこと。

注三 御庄亭子の帝の莊園。

注四 打出の浜琵琶湖畔の地名。

注五 院ここは亭子の帝を指す。

注六 ささら波さざ波。

問一 傍線部アイウエを現代語訳しなさい。

問二 二重傍線部(1)について、「亭子の帝」が命令を下した理由をわかりやすく説明しなさい。

問三 二重傍線部(2)について、なぜ「近江の守」はこのようなことをしたのか、わかりやすく説明しなさい。

問四 本文中の和歌(ささら波…)を、「君」が誰を指しているかわかるように現代語訳しなさい。

問題 四

次のA B二つの文章は、北宋の第四代皇帝・仁宗（一〇二二〜一〇六三年在位）について書かれたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。（設問の都合上、送り仮名を省略した所がある。）

A (仁宗) 一日、晨興語近臣曰、「昨夕因不寐而甚飢、思食。」  
焼

「羊。」侍臣曰、「何不降旨取索。」仁宗曰、「比聞禁中每有取索、

外面遂以為例。誠恐自此逐夜宰殺、以備非時供應、則歲月

之久、害物多矣。豈可不忍一夕之飢、而啓中無窮之殺也。」

（魏泰『東軒筆錄』による）

B 宋仁宗燒羊忍飢、史以為美談。又一小説、「帝春日步苑中、

還宮顧嬪御曰、「渴甚。可速進熟水。」嬪曰、「大家何不外

面取水、而致久渴耶。」帝曰、「吾屢顧、不見鐮子。」  
苟問之、即

有抵罪。故忍渴而歸。」帝真賢君哉。飢渴尚可忍、況其他乎。

（孫能伝『剡溪漫筆』による）

- 注一 焼羊||羊の焼き肉。
- 注二 旨||命令。
- 注三 外面||外。ここでは皇帝の私的な宮殿の外にいる臣下たちを指す。
- 注四 以為例||毎回のことと考える。
- 注五 逐夜||每晚。
- 注六 宰殺||切り殺す。解体する。
- 注七 嬪御||宮女。下の「嬪」も同じ。
- 注八 熱水||沸騰させた湯を冷ましたもの。湯冷まし。
- 注九 大家||皇帝の側に仕える臣下や宮女が皇帝に対して用いる呼称。
- 注十 外面||ここでは苑中を指す。
- 注十一 鐮子||飲み物のことを担当する役人。湯茶係。



- 問一 二重傍線部アイウエの読みを、送り仮名も含めてすべて平仮名で書きなさい。
- 問二 傍線部(1)を現代語訳しなさい。
- 問三 傍線部(2)はどうか、本文に即してわかりやすく説明しなさい。
- 問四 傍線部(3)をすべて平仮名で書き下し文にしなさい。
- 問五 波線部について、どういう点が「賢君」であるのか、A B二つの文章全体の内容を踏まえて説明しなさい。